

遙かなる復興への道 番外編

歌声の響

ダンジュカリユシヌ ウタグイヌフィビチ
(だんじよかりゆしの歌声の響)

ミウクルワレガウ ミニドゥヌクル (見送る笑顔 目にど残る)

これは琉歌という沖縄の島々に伝わる8・8・8・6調の定型詩で、作者は今上天皇です。そして、この詩に美智子様が琉球民謡風の曲をつけられた琉歌「歌声の響」が、2月24日に行われる在位30年式典で披露されます。歌い手はあの三浦大知、沖縄出身です。この選曲、人選には、天皇の沖縄への強い思いが反映されているように思われます。

陛下がまだ皇太子であった1975年、美智子様と沖縄を初めて訪問されました。陛下は「沖縄の人の心に寄り添いたい」という思いで、事前に沖縄の歴史、文化、芸術等多方面にわたって勉強されました。しかし、この頃は昭和天皇の戦争責任を問う声も多く、皇室に対する強い反感もありました。そのため琉球文化研究などの第一人者から「何が起こるかわかりませんから、ぜひご用心を」と心配されていましたが、陛下は「何が起きても受けます」と言われたそうです。実際、この訪問で陛下がひめゆりの塔で献花された際に火炎瓶を投げつけられる、という事件が起きました。

その翌日に向かわれたのが辺野古のある名護市の国立ハンセン病療養所「沖縄愛楽園」。陛下はハンセン病に対する偏見が解かれる前からハンセン病患者に心を寄せられていました。全国の療養所を訪れて、全ての入所者に会われています。愛楽園の人々がお二人を見送る際に歌ったのが「だんじよかりゆし」という、旅立ちを祝って歌われる沖縄の歌でした。陛下に感謝の気持ちを伝えたいという思いで歌ったのです。そして、東京に戻った陛下がこの思い出を琉歌として詠み、愛楽園の人々に贈ったのが冒頭の一首です。

みなさんの「だんじよかりゆし」と歌うその響きが、私たちを見送るその笑顔が、今でも目に浮かんで消えません

今の両陛下にとって、「歌声の響」は、自分たちを受け入れるかどうか分からなかった沖縄で、社会的弱者であるハンセン病を患う人々から、自らの進むべき道に祝福をもらったという思い出そのものなのです。「弱者に寄り添う心」の原点となっていると言ってもよいのではないのでしょうか。

「陛下が作られた琉歌のために特別な曲があればいいのに」という声が陛下の耳に届いたとき、陛下は「それならばぜひ皇后に」とすすめられたそうです。美智子様も陛下の強いご依頼をお受けになり、心を込めて作曲されたということです。

天皇皇后両陛下は「沖縄に寄り添う心」だけでなく、「戦争犠牲者に寄り添う心」、「被災者に寄り添う心」も持ち続けておられます。東日本大震災から8年が過ぎようとしていますが、我々も「被災者に寄り添う心」を失うことなく、微力ながら支援し続けたいと思っています。

みなさん、2月24日、三浦大知が歌う「歌声の響」、お聞き逃しなく！

つばさクリニック院長 石川 亨

(小川孝幸氏が体調不良のため代わりに書きました)